

# 対人的嫌悪感情とその主観的感じ方に関する研究

キーワード：対人嫌悪、体験、嫌悪感情とのつきあい方

人間共生システム専攻

斎藤 明子

## 【問題と目的】

嫌悪感情という一見ネガティブなもののように捉えられがちである。しかし、自分に生じた嫌いという感情は自他を理解するために重要なものであると思われる。

これまで社会心理学の分野では、対人魅力の研究が多くなされている。だが、そこでは好意に関心が集中し、嫌悪にはほとんど関心が向けられていないのが現状である。数少ない先行研究の中で嫌悪感情を扱ったものはいくつかあるものの (Anderson, 1968, 齊藤, 1985, 豊田, 1998)、それらは嫌われると推測される他者の一般的特徴を明らかにしたに過ぎない。これら従来の研究で扱っているものは推測の嫌悪感に過ぎず、それを現実場面においても当てはまるとするには不十分であった。

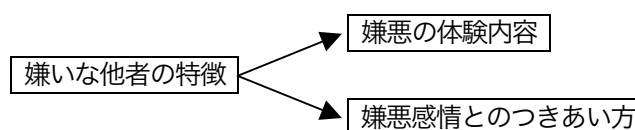
また、対人感情では、好き嫌いは両極にある1つの感情次元ではなく、好意と嫌悪の2つを軸とした4つの関係 (愛憎関係、愛好関係、憎悪関係、無関心の関係) からなっていると考えられている (齊藤, 1990)。すなわち嫌悪とは、単純に対人魅力という好意の要因を逆にすればいいというものではないのである。よって、嫌悪の研究は好意とは独立させて行ったほうがよいと思われる。

これらをふまえて、筆者は卒業論文において、被調査者が実際に嫌悪を抱いた特定の同性の他者の特徴についての「対人的嫌悪尺度」を作成し、それと被調査者の性格特性との関連を検討している。この「対人的嫌悪尺度」では、想定する他者を被調査者と同性に限定した。しかし、現実的には嫌いな他者が同性であるとは限らないだろう。また、実際に嫌悪が問題となるのは相手と接する必要のある場合が多い。

そこで、本研究では、「対人的嫌悪尺度」の名称をわかりやすく「嫌いな他者の特徴尺度」と改め、新たに項目を追加し、想定する嫌いな他者を接する必要のある他者 (同性でも異性でも可) に限定した上で、尺度を再作成することにする。

また、嫌いな相手に対して被調査者側にどのような感じや感覚が生じているのかという「嫌悪の体験内容尺度」と、生じた嫌悪を被調査者自身がどのように意味づけ扱っているかについての「嫌悪感情とのつきあい方尺度」

を作成する。そして、その上で「嫌いな他者の特徴」と「嫌悪の体験内容」との関連、および「嫌いな他者の特徴」と「嫌悪感情とのつきあい方」との関連を検討することにする。それによって、嫌いな他者の特徴で抽出された因子が、認知者の体験というレベルで見るとどのようなものなのか、また認知者の嫌悪感情とのつきあい方とどのように関連しているのかを探索的に検討していくことにする。さらに、その体験内容や嫌悪感情とのつきあい方のパターンによって、嫌悪を質的に分類できないかの検討も行っていく。“体験、の定義としては、吉良の「当事者の活動に伴って当事者に直接感じられうる、認知的側面、情緒的側面、身体感覚的側面を含む主観的的心理的事象」という定義を念頭に置くことにした。



一口に嫌悪といっても、それには質の異なる様々なレベルのものが含まれてくるとと思われる。「嫌いな他者の特徴」を明らかにするだけでは、嫌悪を平面的に並べ立てるだけになってしまう。そこで、嫌悪の質的な違いを分類する手がかりとなるのが、認知者の「体験」や「嫌悪感情とのつきあい方」などの主観的な感じ方なのではないだろうか。体験には明示的なものだけでなく暗示的なものも含まれるとされている。よって、認知者の主観的な感じ方に嫌悪の質を読み解く鍵が潜んでいて、それによって嫌悪が立体的に見えてくるのではないだろうか。

河合 (1992) は、心理面接場面において治療者自身が自分の感じ、感覚、直感、すべてを大切に尺度として用いることの重要性を述べている。嫌いな人に対して生じる自分の感じに目をむけることは、より深く自他を理解することに繋がってくると思うのである。

## 【方法】

### 予備調査：インタビュー調査

調査対象：大学院生 38 名（男性 13 名、女性 25 名）

手続き：接する必要がある嫌いな他者（現在あるいは過去において）を想像して、その人のどのようなところに嫌悪を感じたかを尋ねた。また、その嫌いな相手に対して自分に起こる感じや感覚などを尋ねた。

これをもとに、本調査で使用する質問紙を作成した。

### 本調査：質問紙調査

調査対象：大学生 186 名（男性 82 名、女性 104 名）

質問紙の構成は主に以下のとおりである

- ・相手の性別、相手との関係を尋ねる項目
- ① 嫌いな他者の特徴について尋ねる項目
- ② 嫌いな他者について被調査者に起こってくる感じや感覚を尋ねる項目（嫌悪の体験内容）
- ③ 被調査者が自分の相手を嫌いな気持ちをどう思っているかを尋ねる項目（嫌悪感情とのつきあい方）
- ・なぜ相手のことを嫌いなのかについての自由記述
- ・自己受容尺度（澤田，大出（1990））

## 【結果】

### ①「嫌いな他者の特徴尺度」の作成

不良項目を除き、残りの項目で因子分析を行った（重みづけのない最小二乗法，プロマックス回転）。結果を Table 1 に示す。固有値の減衰状況や因子の解釈可能性などから 6 因子解を採用した。

各因子の内容により、第 1 因子から順に

- 「相手の気の強さ」
- 「私よりも優れていること」
- 「私を嫌っていること」
- 「相手の外見」
- 「私と異なるタイプ」
- 「相手の自己中心性」

と命名した。 $\alpha$  係数は第 1 因子から順に、81、80、86、69、56、57 であった。

### ②「嫌悪の体験内容尺度」の作成

不良項目を除いた上で、因子分析を行った（重みづけのない最小二乗法，プロマックス回転）。結果を Table 2 に示す。固有値の減衰状況や因子の解釈可能性などから 5 因子解を採用した。

各因子の内容により、第 1 因子から順に

- 「萎縮感」
- 「重苦しさ」
- 「攻撃感」
- 「あわれみ感」
- 「気になり感」

と命名した。 $\alpha$  係数は第 1 因子から順に、90、82、78、82、69 であった。

### ③「嫌悪感情とのつきあい方尺度」の作成

不良項目を除き、因子分析を行った（重みづけのない最小二乗法，プロマックス回転）。結果を Table 3 に示す。固有値の減衰状況や因子の解釈可能性などから 5 因子解を採用した。

各因子の内容により、第 1 因子から順に、

- 「相手に原因があると思うこと」
- 「相手を好きになる努力」
- 「相手を嫌う自分への許せなさ」
- 「嫌悪感を相手に隠すこと」
- 「嫌いな理由の分析」

と命名した。 $\alpha$  係数は第 1 因子から順に、88、81、89、69、67 であった。

### ④「嫌いな他者の特徴」と「嫌悪の体験内容」の関連

先ほど明らかになった嫌いな他者の特徴が、被調査者の体験内容にどのような影響を及ぼしているのかを検討するために、強制投入法による重回帰分析を行った。各因子ごとの平均得点を各尺度得点として用いている。

説明変数（独立変数）は嫌いな他者の特徴尺度で抽出された 6 つの因子それぞれであり、目的変数（従属変数）は嫌悪の体験内容尺度で抽出された 5 つの因子それぞれである。

『萎縮感』を目的変数とした分析

強い正の関連「相手の気の強さ」（ $\beta = .389$ ）

正の関連「私を嫌っていること」（ $\beta = .197$ ）

正の関連「相手の自己中心性」（ $\beta = .187$ ）

『重苦しさ』を目的変数とした分析

正の関連「私を嫌っていること」（ $\beta = .176$ ）

正の関連「相手の自己中心性」（ $\beta = .224$ ）

『攻撃感』を目的変数とした分析

負の関連「私よりも優れていること」（ $\beta = -.216$ ）

強い正の関連「相手の外見」（ $\beta = .415$ ）

『あわれみ感』を目的変数とした分析

正の関連「相手の自己中心性」（ $\beta = .169$ ）

『気になり感』を目的変数とした分析

正の関連「私を嫌っていること」（ $\beta = .253$ ）

負の関連「私と異なるタイプ」（ $\beta = -.223$ ）

### ⑤「嫌いな他者の特徴」と「嫌悪感情とのつきあい方」 との関連

嫌いな他者の特徴が、被調査者の嫌悪感情とのつきあい方にどのような影響を及ぼしているのかを検討するために、強制投入法による重回帰分析を行った。各因子ごとの平均得点を各尺度得点としている。説明変数（独立変数）は嫌いな他者の特徴であり、目的変数（従属変数）は嫌悪感情とのつきあい方尺度で抽出された5つの因子それぞれである。

『相手に原因があると思うこと』が目的変数

負の関連「私よりも優れていること」( $\beta = -.206$ )

正の関連「相手の外見」( $\beta = .268$ )

『相手を好きになる努力』が目的変数

正の関連「私よりも優れていること」( $\beta = .220$ )

負の関連「私と異なるタイプ」( $\beta = -.201$ )

『相手を嫌う自分への許せなさ』が目的変数

正の関連「私よりも優れていること」( $\beta = -.211$ )

負の関連「相手の気の強さ」( $\beta = .215$ )

負の関連「私と異なるタイプ」( $\beta = -.197$ )

『嫌悪感を相手に隠すこと』が目的変数

正の関連「私よりも優れていること」( $\beta = .198$ )

『嫌いな理由の分析』が目的変数→

決定係数  $R^2$  が有意ではなかった。

《結果をまとめると、以下のことが言える。》

\*『相手の気の強さ』→ 強い萎縮感を感じるが、相手を嫌いな自分への許せなさは生じにくい

\*『私よりも優れていること』→ 相手を嫌う自分への許せなさが生じ、相手に嫌悪を持っていることを知られないようにし、相手を好きになるように努力しようと思うことが明らかになった。逆に相手に対する攻撃感や相手に原因があると思うことは生じにくいことが明らかになった。

\*『私を嫌っていること』→ 萎縮感と重苦しさを感ずるとともに、相手を気になってしまう感じが生じることが明らかになった。

\*『相手の外見』→ 攻撃感が非常に生じやすく、相手に原因があると思いがやすいことが明らかになった。

\*『私と異なるタイプ』→ 相手を気になる感じも相手を嫌う自分への許せなさも生じにくく、相手を好きにな

る努力もしにくいことが明らかになった。

\*『相手の自己中心性』→ 萎縮感と重苦しさを感ずるとともに、相手をあわれむ気持ちが生じることが明らかになった。

### 【考察】

結果によって明らかになった「嫌悪の体験内容」「嫌悪感情とのつきあい方」という認知者の主観的な感じ方から判断して、今回抽出した嫌悪は主に4つのタイプに分類できるように思われた。

- ①身体感覚など、認知者の内部感覚が生じやすい場合
- ②自分を責める傾向が見られる場合
- ③相手が悪いとする傾向が見られる場合
- ④嫌いなことを特には気にならない場合

それぞれについて、以下に述べていくことにする。

#### ①身体感覚など、認知者の内部感覚が生じやすい場合

『相手の気の強さ』『私を嫌っていること』『相手の自己中心性』であるが、これらには「萎縮感」や「重苦しき」のような身体感覚など、認知者の内部が揺さぶられるような感じが生じていた。これらの嫌悪は項目内容から、すべて“私に対して”というニュアンスが含まれていて、認知者が相手によって直接的に被害を受けている感じをもっているという点で共通している。つまり、相手から自分に対して向けられる不快なものを感じたときに、認知者の身体感覚など、より内的な部分に近い感覚が生じやすいことが推測される。また、このうち『相手の気の強さ』には萎縮感が非常に生じやすいことと、『私を嫌っていること』には相手を気になる感じが生じやすいこと、『相手の自己中心性』には相手をあわれむ感じが生じていることが特徴的であった。

#### ②自分を責める傾向が見られる場合

次に『私よりも優れていること』である。これには相手を嫌いな自分への許せなさが生じ、自分の嫌悪感を相手に隠し、相手を好きになるような努力が生じやすくなっている。この『私よりも優れていること』は厳密にいうと妬みの感情であると思われる。この場合、認知者の感覚は自分に原因があることを暗に知っているように思われる。よって、相手を嫌いなことへの罪悪感が生まれ、相手を好きになりたいと思うのであろう。

### ③相手が悪いとする傾向が見られる場合

次に『相手の外見』では、嫌いな原因は相手にあると思う傾向が強く、相手への攻撃感が生じやすいことが明らかになっている。外見のような表面的なものに対する不快感には、認知者を攻撃的に駆り立てるものがあるのかもしれない。しかし、このときに本当に相手に原因があるのかというと、そうとはいいきれないと思われる。筆者の卒業論文での研究において、認知者の「劣等感」や「顕示性」や「非協調性」という特性が、『相手の外見による嫌悪』に影響を与えていることが明らかになっている。よって、他者の外見を嫌いだと感じるときには認知者側の要因も大きく絡んでくることが推測される。

### ④嫌いなことを特には気にならない場合

最後に『私と異なるタイプ』に対しては、気になり感も相手を嫌いな自分への許せなさも相手を好きになる努力も生じにくいことが明らかになっている。このことから、認知者は相手を嫌いなことを特には気にしていない様子がうかがわれる。タイプの違う人に対しては、嫌悪というよりも自分との“合わなさ”を感じる人が多いのではないだろうか。これは自分と相手とでどちらが悪いとは言えないものであろう。よって、タイプが違うから嫌いでも仕方がないし仲良くなろうとも思わない、と最初から割り切っているとも考えられる。

以上のように、認知者の主観的な感じ方に目を向けることで、その嫌悪の持つ意味や質的な違いが明確になってくるように思う。嫌悪が生じたときに、自分に生じた感じを味わってみてはどうだろうか。そうすることで、自分の感覚が何を教えてくれているのかが徐々に見えてくるかもしれない。また、相手と無理して仲良くしなくてもよい場合や、逆に好きになれる可能性がある場合などの見極めができるようになるのではないだろうか。

そのようなものの見方というのは、我々の日常の人間関係においても、また臨床場面でクライアントを理解するときにも重要になってくるように思う。そして、自分に生じるどんな感じをも大事にすることで、物事を奥行きをもって理解できるようになると思うのである。

### 【今後の課題】

今回は認知者の主観的な感じをもとに嫌悪を検討していった。しかし今回考察した嫌悪の4つのタイプの分類はまだ推測の段階であり、今後の課題としては、認知者の他の特性との関連も検討して、より細かく嫌悪について探っていく必要があるだろう。